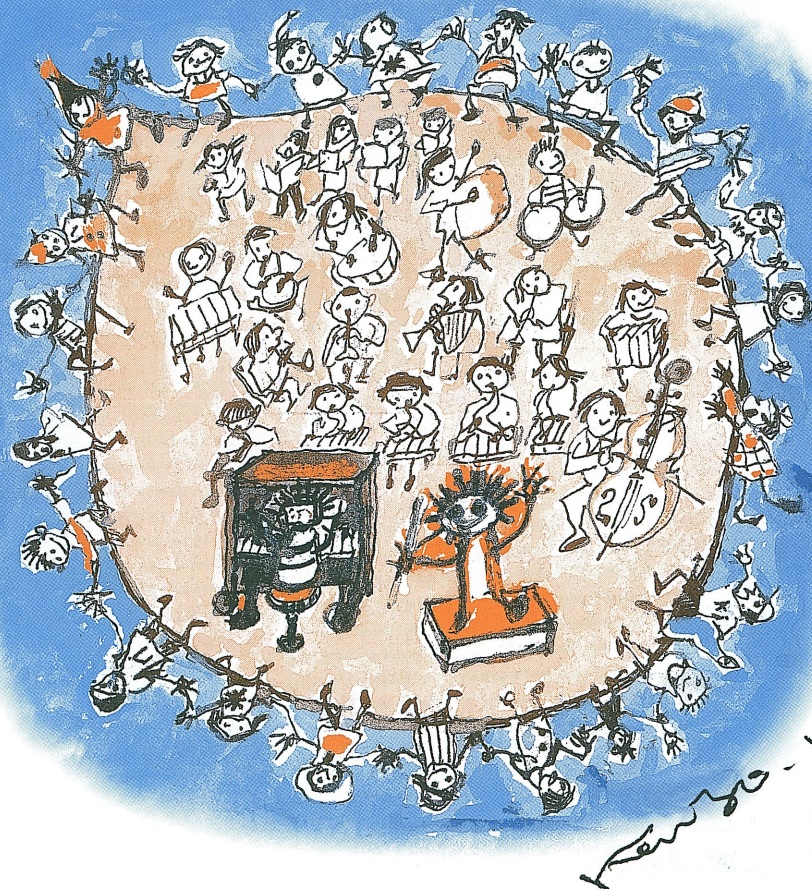


乳幼児期の育ちと保育を考える

2007

8

幼児の 教育



幼児の教育



第106卷 第8号

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第106巻 第8号

もくじ

●巻頭言

散歩のすすめ

宍戸健夫

特集 緑蔭図書紹介

絵本と子ども 遊々

村石昭三

かたつむりの動く家

皆川美恵子

「いのち」について考える

横山洋子

トリイ・ヘイデン

『シーラという子』にみる被虐待児と教育者

篁倫子



「子ども」と「おもちゃ」と「創造力」(2)

和久洋三

子どもの居場所としての学童保育

益田美紀

海外の窓から見えた日本の幼児教育

松本信吾

●保育者になつたころ(3)

大多和 檀

熱い想い

ある日

●お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(8)

植村朋弘

観察することとイメージすること

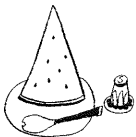
●子どもと保育の情景(8)

戸田雅美

遊びは不思議

観察者と保育者の対話(5)

M・S / T・K





巻頭言

散歩のすすめ

穴戸 健夫

晴れあがった日、子どもたちは園外に飛び出したい気持ちでいっぱいです。多くの園では、安全性を確認し合いながら、楽しい散歩マップを作っていて、子どもたちと散歩に出かけています。

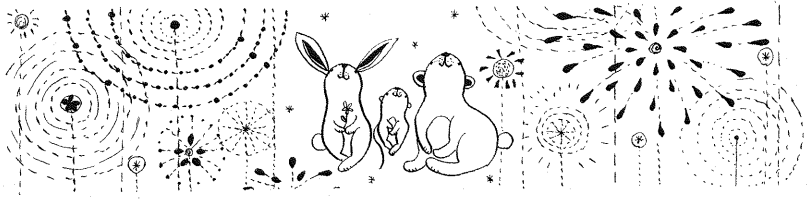
評判のアニメ『となりのトトロ』の主題歌「さんぽ」は、絵本『ぐりとぐら』の作者、中川李枝子さんの作詞です。

あるこう あるこう わたしはげんき

あるくの だいすき どんどんいこう

子どもたちは、散歩の中で、この歌を歌っています。

中川さんは、保母学院を出ると、小さな無認可の保育園で保母をしていました。そのころの思い出を、「私は保育園の子たちと、毎日のように近くの公園を散歩しました。十五、六人の子がふたりずつ手をつなぎ、住宅地の入り組んだ道を二〇分ぐらい



歩くのです」と書いています。

子どもたちは、「鳥かこの下がった家」「犬のいる家」「花壇のある家」に立ち止まって、観察するのが大好きでした。道端に子猫がいると子どもたちの口から「ちいさなねこ おおきなへやにちいさなねこ」と絵本の一節が、流れでるのです。

これは、保育者であれば、誰もが経験する散歩の風景だろうと思います。ここに、保育の原点があります。

行動がことばへ、ことばが行動へ

ところで、話が変わりますが、岡本夏木さんの『幼児期——子どもは世界をどうつかむか——』を読んだことがありますか。子どもにかかわる文化には、子どもたち自身がつくる「子どもの文化」とおとながつくって子どもに与える「子ども向け文化」の二つがある。後者は、今日ではコンピュータのソフトやゲームであったり、早期教育のための塾であったりして、その勢いは、「子どもの文化」を「空洞化」してしまふほどである、と言うのです。そして、「子どもの遊びと子どもの文化の空洞化は、幼児期そのものの空洞化につながります」と警告しています。

では、本来の「幼児期」とはどういうものか。岡本さんは、「幼児期では行動がことばへ、ことばが行動へと相互に翻訳され、確認されあうことによって、行動とこと



ばのそれぞれが、よりしっかりと生活の中に根づくこと」が大切なことであり、そしてまた、そのことは「認識の新しい発達を促す土台」を作っていくことになると思っています。

この「行動がことばへ、ことばが行動へ」という提案には、大いに共感するものがあります。

ずっと昔のことですが、まだ、参加者の少なかった日本保育学会（一九五八年）で、私を含めた五人で「話し合い」についての共同研究を発表したことがあります。その時は「話し合いから行動へ、行動から話し合いへ」が、私たちの提案でした。

今日のように情報産業が進んでいない時代でしたが、戦前のような「おとなが押しつける」保育でもなければ、そうかといって、子どもの自由だという「放任」保育でもない、第三の道を探究するという実践的な課題にぶつかっていました。それが、私たちの「話し合い保育」の提唱であり、子どもたちとの共同の探求的な保育への提案でした。

散歩は子どもの文化

ここで、もう一度、散歩に戻って考えてみましょう。散歩は、子どもたちの共同の「行動」です。子どもたちの楽しい「行動」として、改めて見直してほしいというこ



散歩は行動力を伸ばすばかりでなく、感性を豊かにします。四季折々の移り変わりに眼を向け、自然の美しさを感じ、自然への愛を育ててほしい、と思います。

「自然環境の尊重を育成する」(子どもの権利条約39条)ことは、幼い時代からです。

また、散歩は感性を育てるばかりでなく、知性を育てます。散歩で見つけた小さい花を「なんとという花なの?」と聞く。わからなければ、園に帰って図鑑で調べてみる。ここから科学する心が育ちます。

子どもたち同士で、それぞれの体験(散歩とは限らないのですが)を語り合うという楽しみも生まれます。「ダンゴムシ」に興味をもった子どもたちが、飼ってみようということになり、「ダンゴムシ」の習性をいろいろ聞いたり、調べたりして、わくわくするような好奇心を育てていきます。

そうした中で、さまざまな問題にも、たじろぐことなく挑戦し、みんなで力を合わせれば解決するのだ、という自信をもつようになります。

岡本さんの言うような「子どもの文化」も、ここから生まれるのではないでしようか。
(同朋大学)

参考文献

中川李枝子『絵本と私』福音館書店 一九九六年

岡本夏木『幼児期―子どもは世界をどうつかむか―』岩波新書 二〇〇五年

宍戸健夫『保育実践をひらいた50年』草土文化 二〇〇〇年

特集

緑蔭図書紹介

絵本と子ども 遊々

村石昭三

「緑蔭」の言葉で思い出したのは、私が幼児教育にかかわるようになった四十年ほど前、手にした倉橋惣三著『育ての心』（フレーベル館）の次の一節でした。題は「涼しい顔」。

∴熱風裡に居て熱を知らず、汗にぬれて汗を知らぬ幼児の顔。今鳴いている一匹の蟬をねらって、万象無に帰せる幼児の顔。（後略）

に心の涼しさを見、さらに「日かげ」の題で、

∴日盛りの中を駆けまわって、その広い明るい光線に、ぐんぐんと活気をあおり立てられている子どもが、ふと、涼しい木かげに来て、にっこりと、なごやかな顔を見せることがある。

として、「子どもには一ぱいの日なたと共に、静（後略）

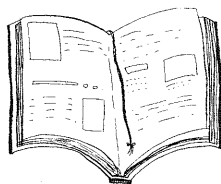
かな日かげも与えてやりたい。」と保育論に照応させています。

さて、日かげ、緑蔭といえば、絵本などは子どもに好適でしょう。

私は絵本や童話の世界に遊ぶ子どもの姿を追うのが大好きです。その姿を話の主人公にしたのがクロケット・ジョンソン作『はろるとむらさきのくれよん』（文化出版局）です。

あるばん、はろるとは ふっと つきよのさん
ほが したくなつた。

という出だして始まり、「さんほが したくなつた」から、クレヨンで線を引いて、道を描く。独り



言のように、月夜の散歩だから月を描く、というようにして、絵本の中で、はろると坊やの遊々が始まるのです。子どもが絵を描き、言葉と話す楽しみ、また、絵本に遊ぶ楽しみも、はろると坊やのように、先へ先へと想いの世界を広げていくことと同じではありませんか。

家庭でも、絵本の読み聞かせをすると、今見ているページより先のページを見たがって首を曲げ、のぞこうとするしぐさに気づかれたことがあるでしょう。

子どもは話の先を創造するのが大好きです。

ずっと以前、小学館の雑誌『幼稚園』で、言葉のテスト欄の作成にかかわった時でした。子どもが話の先をどのように創ったか、「もし、あなたが○○だったら」の問いかけです。題材は、イソップの『牛とかえる』です。「あなたがかえるの子どもだったら、おなかが破けてしまったお母

さんがえるを見て、どうしますか」の問いを用意しました。答えは、「チチン、プイプイする」「赤チンをつける」など、たくさんありました。

このように、子どもはどんな話の世界に遊んだか、どんな話の先を創ろうとするかに視点を置いたのが、イタリアのJ・ロダリー『ファンタジーの文法』(筑摩書房)という本です。小学生の指導のように、話をもとに戻して理解を尋ねると違って、幼児には、次はどうなるかと、先に想いを進めるところに、ファンタジーの世界が広がると考えたのが、児童文学者ロダリーだったのです。ロシア民話『おおきなかぶ』(福音館書店)の絵本では、文は「やっと、かぶは ぬけました。」で終わっていますが、表紙の絵は、かぶをかついで運んでいますね。文の読み聞かせが終わったら、「このかぶは持って帰って、どうしたんでしょうね」という口添えもいい。

話の途中で、あなたならどうするかと、問いかける試みもあります。

ある園で、レオ・レオニ『スイミー』(好学社)の絵本を扱った公開保育がありました。智慧と勇気のある小さな魚スイミーが仲間魚たちと力を合わせ、大きな魚に立ち向かうという話です。そして、読み聞かせが進んで、「そのとき、いわかげに、…」と文があり、「だけど、いつまでも、そこにじっと してるわけには いかないよ。」とスイミーが言う。これからどうやって、まぐろを追い出すかを考えると、保育者は「みんなだったら どうするか」と質問をしたのです。すると、子どもたちがいろいろ言う言葉に混じって、

A児 包丁デ チョンギツチャウ。

B子 魚ガ ソンナコト デキヤシナイ。

のやりとりがありました。A児は人間のままの

目。B子は自分を小さな魚に見立てた目で、話の先を考えている。この違いなのです。

別の出来事。誰よりも話の先を早く見たいと、行動に移した子がいました。『ごぞっこ まだだ が』（新世研）は、方言まじりの文で、『さんまいのおふだ』でも知られる東北地方の民話。寺の小僧さんが和尚さんから三枚のお札をもらって旅に出るが、泊めてもらった宿で、鬼ばばに見つかる。逃げ出そうと便所の柱にお札をはって、鬼に「ごぞっこ まだだが」と聞かれたら「まだだ」と言ってくれと、頼んで逃げ出す場面にきました。

ここで、保育者は子どもたちの緊張感を高めるように、「ごぞっこ まだだが！」と繰り返し返した時です。グループの一番後ろにいた男児がすくつと立ち、かけて前に出て、保育者の左手側に立つたが、すぐ、きびすを返して、後ろを回り、保育

者の右手側に立って、絵本をのぞきこんだのです。

この子の行動は、なぜ？ というと、後ろにいたのでは、話が聞きにくいし、絵も見づらい。また、同じ保育者の側でも、左手側は絵本の話の終わり、右手側が一番最初に次の絵の話が聞けると思ったのではないか、というのが参加者たちで話し合ったことでした。

最後に紹介するのは、赤ちゃん絵本と呼ばれる、ディック・ブルーナの『ちいさな うさこちゃん』（福音館書店）。「なぜ、うさこちゃんいつも前を向いているの？」「それはね、赤ちゃんから絵本のうさこちゃんに声をかけられたとき、いつも正面を向いてお話ができるようにね」というのが、文と絵の作者ブルーナさんの答えでした（新聞記事より）ね。

（国立国語研究所 名誉所員）

かたつむりの動く家

皆川美恵子

読みたいと思いつつも、日ごろの忙しさから積まれてしまった本を取り出し、時間をかけて、ゆつくりと読書できるのが、夏休みの欲びでなくて何でしょうか。細切れの寄せ集めの時間ではなくて、たっぷりとした時間があることの素晴らしさは、読書でこそ満喫できます。さあ、夏休み、好きな本を抱えて、どこかお気に入りの場所にこもりましょう。

『かたつむりハウス』

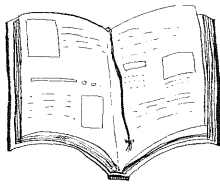
アラン・アルバート作 ジリアン・タイラー絵

岡田よしえ訳 評論社

絵本に、ゆかいな郵便屋さんシリーズというのがあります。自転車に乗った郵便さんが、おとぎ話の主人公たちに手紙を届けるという趣向ですが、クリスマスの巻は、特に仕掛け絵本として素

晴らしく、友人・知人にプレゼントしたくなるような絵本です。イギリス人夫妻による作品ですが、絵描きであった夫人が亡くなったために、残念ながら、シリーズは終了してしまいました。

この絵本の、かたつむりの表紙の絵に惹きつけられ、作家名も発見して、すかさず買ったものの積んで置きました。さて、ゆつくりとページを繰って眺めていくと、動植物の絵も繊細で幻想的であり、おばあさんが即興で語るお話の世界が魔法のように鮮やかに彩られています。アランさんが、優れた才能を秘めた画家と出会えたことを



祝福せずにはいられなくなり、思わずうれしさがこみ上げてきました。

『ぼくとールピーの神様』

ヴィカス・スワロップ作 子安亜弥訳

ランダムハウス講談社

赤ちゃんポストのことが、日本でも話題となりだしています。イタリアではローマ法王の勅令により、一一九八年に始まる歴史があるとされています。キリスト教カトリック系の病院や養育施設に設置されている場合が多く、マザー・テレサも行っていたと聞きます。

ところで、この物語は、インドのニューデリー聖メアリー教会に出されていた古着の慈善箱に捨てられた赤ん坊が、主人公です。貧しい生活の中で学校にも行かずに生き抜き、十八歳になった

時、テレビのクイズ番組に出場して、高額の賞金を勝ち取るという話です。多くの難問をなぜ、スラムに住む無学な青年が解答できたのでしょうか。十三問の質問に対し、一つひとつの解答までに及ぶ経緯が、青年のこれまでの生い立ちの生活を描き出すという仕掛けとなっています。

すさまじいばかりの社会問題が渦巻いているインド社会において、家庭、学校とは無縁に生まれ落ちた子どもが、難問を次々と解答していく衝撃的なストーリーは、読みだしたら手放すことができないほどの迫力です。何が子どもを人間として教育し、知識・教養を身に付けさせることができただのでしょうか。その逆に、家庭とは何であり、学校とは何なのでしょう、と考えさせずにはおきません。

この青年は、賞金を獲得する段になって、ペテ

ン師の濡れ衣で陥れられそうになります。その青年を救済したのは、突如現れた謎の女性ですが、物語の所々に見え隠れする母性の影に、インドの母神信仰を見る思いがしてなりませんでした。

『小説 渋沢栄一』

津本 陽 幻冬舎文庫

お茶の水女子大学の附属幼稚園に大切に伝えられている青い目の人形、メアリーさんを調べる機会がありました。昭和二（一九二七）年三月三日の雛節句に間に合うようにアメリカから贈られてきた親善人形ですが、日本側の受け入れの中心になり、同年のクリスマスには、アメリカの子どもたちへ日本人形を答礼として贈ることに尽力したのが、渋沢栄一でした。

青い目の人形を手にした渋沢栄一の有名な写真

が残されていますが、その時洪沢は八十七歳でした。人形を通じて日米の子ども同士が交流する国際児童親善会のために奔走した洪沢栄一（天保十一（一八四〇）年～昭和六（一九三二）年）の人生は、どんなものであったのでしょうか。伝記

小説としての本書は、激動の幕末、明治、大正、昭和を生きた九十一年間の軌跡を描いており、興味尽きないおもしろさなのです。

埼玉県深谷、利根川が氾濫することが多い土地の農家に生まれた栄一は、父親が農業よりも藍の事業に力を注いだ結果、富裕な資産家の子どもとして成育します。この子どもが、農村でどのような教育を受け、やがて徳川慶喜に仕える武士になったのでしょうか。一八六七年、パリで開催された万国大博覧会に出かけることになるのですが、海外で何を学び取ってきたのでしょうか。

帰国してみると、明治新政府の時代でした。商人として生きる決心をした栄一は、金融・経済の分野で力を発揮して、国立銀行を創設していきます。

ここに紹介した本は、うごめくかたつむりの家に住むことになる物語であったり、捨て子がたどる数奇な物語であったり、政変によって世の中がひっくり返った世の中を生き抜いた人物の物語です。まるで人が生きるといふことは、予想もつかない、人智も及ばない不思議な世界と直面することであることをささやいているかのようです。

地球という動く家に住むことを運命づけられている人間なのですから、不思議との遭遇こそが、人生の妙味なのでしょう。

（十文字学園女子大学）

「いのち」プロジェクト

横山 洋子

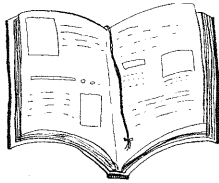
私が教師になった年の秋、友人が自殺しました。ずっと演劇活動を一緒にしてきた仲間の一人でした。葬儀の翌日、私は担任していた小学二年生の子どもたちに何か伝えなければという衝動にかられ、「いのちの授業」を試みました。新任教師のつたない授業でしたが、子どもたちは担任の涙に驚き、真剣に話を聞いてくれました。

いじめによる自殺や、ちょっとしたことで友達を刺してしまうような痛ましい事件が起きる。今、命の重さを子どもたちにどのように伝えていくかということ、子どもにかかわる一人ひとりの大人が真剣に考えていかなければならないでしょう。全国で多くの教師や医師や体験者などによる「いのちの授業」が行われています。そこで

は、絵本も教材としてよく使われます。

ここでは近年出版された、命について考えさせられる絵本を三冊紹介します。

『いのちのおはなし』（日野原重明・文 村上康成・絵 講談社）は、日野原氏が二〇〇三年に、お茶の水女子大学附属小学校で始めた「いのちの授業」の再現としてできた絵本です。日野原氏は、「命はきみたちのもっている時間だといえますよ」と子どもたちに語りかけます。「時間を使うことは命を使うことです」「これから生きていく時間は、それがきみたちの命なんですよ」。そして



て、あとがきで「こころ」について、「お互いに手を差し伸べ合って一緒に生きていくこと。自分以外のことのために自分の時間を使おうとすることです」と述べています。

日野原氏の言葉から、命は自分に与えられた限られた時間であることが意識されます。この絵本に出合った子どもたちは、素朴に長生きしたいと願い、時間を大事に使おう、人が喜ぶことを進んでしようと思うでしょう。そして、自分のできることは何だろう、したいことは何だろうと考えるようになるでしょう。毎日のことで精一杯になりがちな大人でも、絵本の中のように、誕生した時を0とした数直線を引き、現在の自分の年齢の所に印を付けると、あと残りの数十年をどう生きるか、真剣に考えずにはいられません。

この絵本を読んで、「一日一生」という言葉を

思い出しました。今日だけが一生であると思ひ、明日がなくても悔いのない一日を過ごすということです。そうした一日一日の積み重ねが人生であり、そうすることで一生を納得のいくものにできるのです。

次に取り上げるのは、『いのちのまつりーヌチヌグスージ』（作・草葉一壽 絵・平安座資尚 サンマーク出版）です。この本は、命というものを自分のご先祖さまを意識させることによって、その神秘に気づかせてくれます。後半の畳まれたページは四倍に広がり、そこには増え続けるご先祖さまの顔、顔、顔！ 子どもたちは驚きの声を上げるでしょう。

この絵本から子どもたちは、自分にはさまざまな時代を生きたご先祖さまが大勢いること、太古からつながっている命が今、奇跡的に自分にも

ぐつてきたこと、このバトンを次の世代に渡さなければならぬことを、目の前で新しい世界が開けていくように、じわじわと感じることができるといふでしょう。現代は個人の幸せを追い求めることがもつぱらの関心事ですが、自分は一人で生まれて一人で生きていくわけではないことにハッとさせられます。また、日ごろ、意識にはのほらぬ血族のつながりを意識することになります。

陶彩画家の草場氏は、父親を亡くした経験から命の大切さを伝えたいと、二〇〇四年五月、自費出版でこの絵本をつくったそうです。「与えられた命を今、輝きながら共に生き抜くことがヌチヌグスージⅡいのちのまつりである、という想いをこめた」と語っています。

この絵本を読んだ後には、たくさんのご先祖さまがいつも自分を空の上から応援してくれている

ような心強さを感じるから不思議です。

今年、この絵本の続編『つながっている——いのちのまつり——』(同)が出版されました。

この本は、「人はみんな生まれてくるまで、お母さんとへその緒でつながっている」ということを意識させてくれます。どんなに偉そうな人も、人はみんな、昔は胎児だったのです。母親とへその緒でつながれていなかった人はいません。母と子は、元は同じ肉体であり、同じ血液や体液が流れていたのだということに子どもたちは気づくでしょう。

この絵本の中にも、一ページが九倍に広がる大きな絵が折り込まれています。そこには宇宙の彼方、銀河系を思わせるような、へその緒でつながってプカプカ浮かんでいる千人以上の胎児たち！ 胎児同士がへその緒でつながるといこと

は実際にはありませんが、お母さんが胎児のころ、おばあちゃんが胎児のころというように、時間を超越した描き方をしていると解釈するとよいでしょう。

草場氏は、「おへそを見るたびに思い出ししてほしい。どんな時代も生き抜いてきた、たくさんのお母さんがいたことを。おへそに触れるたびに感じてほしい。お母さんを通して命はひとつにつながっていることを」と呼びかけています。

「いのち」を考えることは、どう「生きる」か、「死」をどうとらえるか、ということにもつながっていくでしょう。自分の命を大切にしながら人の命も大切に、そのような生き方ができる子どもたちを育てていくことが、私たち大人の使命だと感じています。

(千葉経済大学短期大学部)

トリイ・ヘイデン 『シーラとくろくろ』にみる 被虐待児と教育者

篁 倫子

トリイ・ヘイデンは、主に情緒障害教育の現場で出会った子どもたちとの奮闘と魂の触れ合いの体験を本にして世に表し、多くの人々に感動を与えてきたと言ってよいでしょう。『シーラという子』はヘイデンの処女作で、一九八〇年に出版されたものです。一九七〇年代のアメリカ、アイオワ州の地方都市を舞台とし、生まれ落ちて（シーラを産んだ時、母親はまだ十四歳であったことを

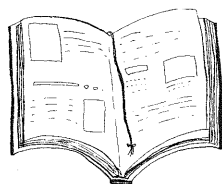
考えると）から、愛情も庇護も十分に受けることなく、貧困の中で、あらゆる虐待（心理的、身体的、養育放棄、性的な虐待）を受けてきた六歳の小柄な少女シーラが、数々の破壊的で、残忍とも言える攻撃的な行為を続けていきます。その中で、初めて自分を受け入れ、守り、愛してくれる教師と出会い、人を信頼し、人との間にきずなをはぐくむことを学び始めていく軌跡を、当事者で

ある作者が書きつづった実話です。

ヘイデンはその卓越した筆力で、シーラとの関係が築かれる過程や、それぞれに障害や深刻な問題をもちクラスメイトたちが織り成す日々のドラマを見事に書き表しています。

この本が悲劇の子どもと、慈愛に満ちた教師とのきずなづくりの物語に終わっていないのは、筆者の教育の専門家としての理解・行動、一人の人間としての自然な感情と行動、そして両者の葛藤を内省的に見つめる姿勢が、ストーリー全体に貫かれていくからでしょうか。

シーラが極めて優秀な知能をもち、聡明で美し



い少女であることが読者を引き付け、ストーリーを一層ドラマチックなものにしています。ヘイデン自身も、この比類なき少女を前に、魅了され、教師として強く動機づけされたことを偽ることなく語っています。

筆者がこの作品に感動させられた一つの大きな理由は、ヘイデンの教育者としての熱意と姿勢はもとより、その子どもの観方の確かさ、内的な洞察力、共感性の豊かさ、そして教育的判断の適切さと指導力にあります。彼女がシーラに対して行ったのは教育であり、同時に心理治療的なかわりです。彼女が特殊教育のみならず、臨床心理学的知識と訓練をもち合わせていたとしても、実際に治療者と教師の役割を共に果たしていくことは容易ではありません。さらに、それが二十代の経験浅い時期になされたということに、心理臨床を専門としながら特殊教育にいくらかかかわって

きた筆者は驚嘆せずにはいられません。

もちろん、シーラが抱える問題（精神医学的には愛着障害）は五か月ほどの幸福な日々で解決されるものではないことや、ヘイデンとの別れが再度の見捨てられた体験となったことは統編の『タイガーと呼ばれた子』にも記されています。それでも、シーラにとつてヘイデンとの出会いと彼女から受けた教育は生きていく上での大きな力となったと言えるでしょう。

さて、わが国においても児童虐待は増加の一途をたどっており、最近値平成十七年度の相談件数は三万四四五一件であり、十年前の平成七年度の二七二二件と比べても桁違いの数であり、その内容も困難な事例が増加しています（厚労省HP）。相談件数の急増には、社会的認知が幾分高まってきた中で掘り起こしが進んできたことと、頻度そのものの上昇などの要因が考えられます、しか

し、相談に上がってこない事例を見積もれば、その実態は、なお厳しいものでしょう。

本書に描かれた三十年以上前のアメリカの後を追従するかに見える点は空恐ろしいことですが、虐待が、ある特定の社会経済的環境で起こるものとは限らず、日常的な保育や教育の場で虐待を被っている子どもに出会う可能性があるという認識を、われわれはもたなければならぬでしょう。

教育についてみると、昨年、二〇〇六年十二月に公布・施行された改正後の教育基本法では、わが国の教育の最も基本的な考えや枠組みに、いくつもの変更が加えられました。その中に、障害のある子どもに対する教育の目標、対象、内容、場についての改革も含まれています。

アメリカにおける特殊教育の枠と対象は州によって幾分異なりますが、情緒障害学級に学ぶの

は、原因はさまざまであるにせよ、心理的問題を背景にした情動や行動の問題および著しい不適応を示す子どもたちです。シーラはまさに、その際立った事例と言えるでしょう。一方、日本の情緒障害教育では発達障害である自閉症の子どもや心理的な要因による場面かん黙の子どもがその主な対象となっており、いわゆる行動問題や非行の子どもたちは支援の対象とされていません。

虐待を受ける子どもたちには福祉、司法、行政などの多方面からの支援が必要です。当然ながら、そこに教育的支援も含まれるべきです。しかし、現状では、教育の場においては虐待の通告は義務付けられていても、その子どもたちへの教育的対応について何ら具体的な策は講じられていません。

学校は、その活動時間の長さから言っても、子どもの様子を最も把握し易い場です。まずは虐待

を受けている可能性がある子どもに気づくことが必要です。そして、既に虐待を受けた子どもたちに対しては、個に応じた教育的配慮と支援が必要となるでしょう。虐待を受けた子どもが発達のさまざまな面で問題を抱えることは想像に難くないわけで、教育がより積極的・体系的にこの問題に取り組んでいくことが急務ではないでしょうか。

そして、教育がこの子どもたちに何をなせるかを考える時、『シーラという子』は大切なことを教えてくれているように思います。

(お茶の水女子大学)

参考文献

トリイ・ヘイデン (入江真佐子訳) 『シーラという子』
早川書房 一九九六

厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/>

「ゆづも」と「おもちゃ」と「創造力」(2)

〈お茶の水女子大学附属いずみナーサリー講演会より〉

和久洋三

多様と統一

ここで積み木遊びを通して、人間の思考について考えてみたいと思います。不思議なことに積み木遊びは思考の経路に見事に一致しているのです。

では思考経路とはどうなっているか。実は二つのことしかやっていません。「多様な情報を統一する」「統一された情報を多様化する」この二つです。これを往復しているのです。

見立て遊びで説明します。積み木を持って、

「ブーブーブー、バスだよ」と動かす。これが「一つのもの（統一された情報）を多様化する」世界であり、応用力につながっていくものです。それを一歳半の子が、誰に教わるわけでもないのに始めるのです。人間というのは本能的に自分を育てようという欲求をもっていて、それに向かって活動していきます。

それと同時に、いろいろなものがあると、寄せ集めて遊び始めます。これは「多様な情報を統一する」活動です。これらの活動が活発になることは、

思考が育っているということです。その時期が一歳半ごろです。

また、一つの直方体（の積み木）をバスに見立てられるというのは、抽象能力が育ってきているということでもあります。バスにはいろいろな形があるけれども、せんじ詰めれば、六面体で動くもの“ということを直感していない限り、これをバスに見立てることはできません。相当高度な能力です。それを一歳半の子が身につけているのです。

なぜ一歳半の子がその能力を身につけるのでしょうか。

二歳になると言語活動が始まります。言語というのは、抽象能力が育っていないと獲得できないからではないでしょうか。二歳になってしゃべり始める前に、子どもは見立て遊びの中で、その抽象能力を形を通して自己開発しているのです。

ところがほとんどの親は、子どもが「ブーブー、ママ、バスだよ」と言うと、「バスって言ったよ、パパ、あした、バス買ってきて」と、（おもちゃの）バスを与えてしまう。子どもは創造的な能力を自己開発することを楽しんでいるのに。バスはバスにしかならない。大人が子どもの自己開発を押しとどめてしまっているのです。

さて、では、この活動が充分に行われるためにはどんな形を与えたらいいのでしょうか。形というの



は、子どもがものを認識したり、表現したりするのに一番理解しやすい対象物です。認識手段には、音とか、においととか、色とか、いろいろなものがありますが、子どもは形に一番関心をもちます。なぜなら、五感を全部使って関係がもてるからです。形あるものは、手に持てばにおいがしますし、なめたら味わえます。何かにぶつければ音が出て、触ることができ、見ることができます。

この形あるものを通して、実は美とか、愛とか、真理とか、形のない世界を見つけていくのが人間です。あるいは逆に、彫刻家、画家、小説家は、形のない美や愛を色や形や文字など目に見えるものにして表現していきます。その行ったり来たりをするわけですが、まずは形を通して認識していく、五感を使って吸収していくことから始まります。

次に、「積み木を」こつやつて立てた。立てたも

のに触れると倒れた」ということがあると、もう一度倒してみるということをやりだします。これを繰り返して、「立っているものは、力を入れれば倒れる」ということを知っていきます。ボールであれば、「ボールは転がるものだ」ということを読み取り、それなら、もう一回転がしてみようとなります。その時に、強く転がしたらどうなるか、軽く転がしたらどうなるかなど試します。そこでだんだんいろいろな活動が始まってきて、より認識を深めていきます。つまり、形は、受け身ではなくて、積極的に働きかけていける対象でもあるのです。

だから子どもはおもちゃで遊ぶのです。実はおもちゃだけでなく、形あるものだったら何でも遊べます。その中でよく遊ぶもの、遊びそうなものをおもちゃとしていられるわけです。

多様と統一に話を戻します。一つのを最も多

様化する形は何でしょう。要するに人間が一番よく遊ぶ形です。それは「球」ボール「です。ボールはどこから見ても同じ、最も単純な形です。

単純であるというのは、単純な秩序をもっているということ。球体は、中心点から表面までの半径が一定であるという秩序をもっています。ぽんと投げて、「あそこで弾ませて彼女に渡そう」とか、「あのグロープに入るようにしましょう」とかできるのは、この秩序が内在しているからです。

単純な法則性のある秩序の形ほど、自由な創造活動が展開されます。秩序と自由。本来は秩序と自由というのは正反対の言葉です。秩序があるから自由が奪われる、いろいろな規則がつくから自由だと、若い時はみんな思います。しかし違うのです。秩序があるから自由になる。球体は秩序があるから遊べるのです。

関係性

「何で?」「どうして?」と四歳児が知ろうとします。これは、因果関係・秩序を知りたがっているということ。それがわかったほうが自由になるからです。お釈迦様が最後に悟ったのは、因果の法だそうですが、それを四歳児が直感していて、「何で?」「どうして?」と因果関係を見つけ出そうとするというのはすごいことです。

きっと、子どもの成長の中で自然の欲求として出てきた言葉や態度をくみ取ってやると、素直で、大らかで、ひねくれない子どもが育つはず。ところが、大人の価値観を押しつけることが先になり、子どもが、今、何を求めようとしているのか、何を願っているのかということをくみ取ろうとする気持ちがないので、子どもは自然に素直に育つこと

ができず、少しずつねじ曲げられてひねくれていくのではないかと思います。素直な欲求を受け入れてもらえないからです。

人間が自由になるために探っているのは秩序を踏まえた関係性です。人間は関係性を見つけ出そう、つくり出そうとしている生命です。「多様な情報を統一する」「統一された情報を多様化する」ことも、関係性探しです。すべての意識は、全部関係性に向かつて働いているという感じがします。

どうして人間の意識が関係性に向かつていくのでしょうか。自然を見ると、植物・動物・土・水・空気があります。その中で人間が生かされています。関係性の中で生かされているということです。簡単に言うと、空気がなくなったら人間は死ぬわけです。水がなくなったら死ぬわけです。人間の命と自然とは、別物ではありません。一つの命です。全部

関係づけられた世界です。だから、その関係性が崩れてくると、水が汚れたり空気が汚れたりして、人間の命にかかわるようなことになっていきます。

創造活動も、結局、多様な情報を関係づけていく作業です。あるいは、一つの情報をいろいろなとらに関係づけて生かしていく作業です。それが、創造活動でもあります。何を見ても、全部関係性に向かつているのは、厳粛な事実で、暗示的です。

今、親子の殺人の尊属殺人がとも増えています。これも、すべて関係性が希薄になっていることからきているように思えます。「メールを通して」「携帯電話を通して」と、全部ワンクッション、機械が間に入ってコミュニケーションがとられています。生の生命と生命がかわり合うということがすごく少なくなつて、関係性をつくり出す中で起きてくるストレスに耐えられなくなつてきています。そ

れが今の社会で一番大きなゆがみが生まれる原因ではないかと感じます。

本来、人間は関係性に対して、とても敏感につくられています。それなのに、その関係性を排除して生きていこうとして、結果として、こういう事態を生んでしまったのではないかと思います。人と深くかかわらないことは、ある意味で楽なのです。

しかし、そこで成立するコミュニケーションは、たかが知れていて、深まりもしないし、強まりもしません。何かの事態が起きると、そのストレスに耐えられなくなつて、殺したり、傷つけたりすることによつて解決するしか方法をもてなくなっている。こういう世界が今生まれてきているという感じがしてなりません。

僕は、おもちゃのことを、「童具」という言葉をつくつて表現しています。

おもちゃの世界だけ、玩具とか、遊具とか、教具とか、教育玩具とか、教育と遊びに分けられている言葉が幾つも使われています。これは、形あるものは認識しやすいため、学びの教材として使いやすいため、教具とか、教材として利用されてきたのだと思います。

けれども、遊びというのは自発的な活動です。自発的な活動の中でこそ子どもには豊かな学びがあるわけです。それを遊と学に分けることはできません。そのために「童具」という言葉をつくらざるを得なかったのです。童謡、童話、童具、それでよいと思います。その童具で遊ぶことは、すべて「関係性を見つけ出し、関係性をつくり出す」遊びを生み出すものです。

（童具館）

（講演 平成十八年十二月九日）

子どもの居場所としての学童保育

益田 美紀

額に汗して、きょうもセミとり

夏も終わりごろになると、鳴いていたセミたちが低く飛び、小学生たちにも十分捕まえられる高さの所に止まるようになります。じっと見つめ、「逃げなよー」と祈りながら虫取り網をかけたのですが、わずかに手元が狂い、セミはさらに上の枝に飛んでいってしまいました。

「おまえがさあ、揺らすからだぞ！」と、見ていた

一年生二人に向かって、三年生のA君。そうそう、何か言わずにはいられないものね、と私は思いました。そしてもう一人の一年生が、「A君、あつちにいたよ、早く、来て」と呼びにやってきました。

私が勤務している学童クラブでは、夏休み中も自分のおもちゃは持ち込まない約束なので、何回か補修して年季の入ったこの虫取り網も共用で取り合っ(もちろん譲り合っ、が理想です)使います。

二、三年生が一通り捕まえると、一年生にも順番が

回ってきます。「ほらっ、この高さなら届くだろ？ やってみろ」と三年生が教える場面もあります。A君はちよつと短気で言葉遣いは荒っぽいけど、虫が大好きな一年生にとつて憧れの存在なのです。

学童クラブは昼間のきょうだい

子どもたちは学校が終わると「ただいま！」とランドセルを背負つて帰ってきます。学童クラブは鍵つ子たちの家庭に代わる場として設置され、そこに通う子どもたちは、かつて「昼間のきょうだい」と言われていました。今は入会を希望する児童が多く、学童クラブの規模は年々大きくなり、私の学童クラブは四十名定員ですが、自治体によつては百名以上のところもあり「きょうだい」というには、あまりに人数が多くなり過ぎてしまいました。

学童クラブの運営は自治体により公設公営、公設民営、父母会運営、社会福祉法人委託、民設民営な

どさまざまです。保育料も四千元から、おけいこごと送迎サービス付きの二万円までと差があります。しかし、どの学童クラブの指導員も、安心して放課後を過ごさせたい、そして単なるランドセル置き場にしたいと思つています。

「子どもの生活から『三つの間、さんま』が失われた」とよく言われますが、学童クラブには狭いながらも「空間」あり、「時間」あり、何より「仲間」がいます。メンバーが変わり、バリエーションがあつても、縄跳びが好きな子どもたちは毎日縄跳びをし、鬼ごっこが好きな子どもたちはきょうもやつている、学童クラブはそんな場所です。こまがはやると手作りのこま台の周りを十数人で囲んで、技を磨き、新しい技を誰かが思いつくと、年度を越えて伝えられ、当の本人が卒業した後まで技は残つていて、遊びの伝承ができる場所です。

毎月一回は誕生会として全員で遊ぶのですが、

「集まって、誕生会をするよ」と声をかけると、「じゃあ、今日は遊べないね」という返答が必ずあります。それほど子どもたちは企画された行事と自由遊びを分けて考えているようです。保護者と合同の縁日や発表会などの行事、ほかの学童クラブとの交流行事などを通じて、子どもたちの意欲を引き出し、仲間意識を育てる一方で、自由に遊べる時間を確保していく必要性を感じます。

就学は親子共に一つの節目

学童クラブは「就労等により保育に欠ける子ども」ということが入会の条件です。厚生労働省の調査によると、全国平均で約二割の一〜三年生が学童クラブに在籍しています。

幼稚園卒園児の家庭では、就学を機会に母親が新たに仕事を始めたり、勤務時間を延ばしたりするケースが多くあります。また保育園卒園児の場合

は、保育園に比べ学童クラブは開所時間が短く、私のところは午後六時までなので、二重保育を頼むか、子どもが鍵を開けて留守番をして親の帰りを待たなければならぬという家庭が多くあります。就学はただ単に学校と学童クラブという二つの集団生活が始まるというだけでなく、子どもたちにとって生活そのものが大きく変わる時なのです。

広い校舎と校庭、お兄さん、お姉さんと一緒に過ごす学校生活、親から離れて登下校することに期待感をもって新学期がスタートします。それは自分で考え、任されることが多くなり、独り立ちの時期にあたります。が、教師一人で大勢の子どもたちに指導をする授業の方式になじみず、立ち歩いてしまうとか、教師に注意されるとかっとなってしまうという子どもたちが年々増え、授業が成立しにくくなっていると聞きます。

就学したからといって何でも一人でできるように

なるわけではなく、まだまだ大人の援助が必要で
す。学校の慣れない環境で疲れた心と体をゆつくり
休め、友達とよい関係を作ることを手助けし、学校
が好きになるように、一年生の春は特に保護者と共
に私たち指導員が支えていく役目があると思ってい
ます。

親にも仲間が必要

今年の春の保護者会のことです。一年間の運営に
ついて私たちからお話してから、出席されたお母
さん方から自己紹介を兼ねて一言ずつ話していただ
きました。「体力がなくて夕ご飯まで起きていたら
ない。朝まで眠ったまま」「学童クラブのことは話
してくるけど、学校のことは全然話さない。一体
どんなふうに過ごしているのやら」「鍵をたびたび
忘れ、困ってお隣さんの家の上がりこんでいる」
と、一年生のお母さん。

「帰ったら眠くなる前に食べられるようにおにぎり
を作っておきましたよ」「学校のことは時間がたつ
から忘れてしまうんですね、うちもそう。様子が聞
きたかったらあらかじめ先生にお願いして時間をつ
くってもらうといいですよ」「鍵はコイルのキーホ
ルダーが便利でランドセルに付けたまま。でも、本
当は一人で鍵を開けるのが嫌で、わざと忘れていく
のかな?」といくつかアドバイスが二、三年生のお
母さんから出されました。

そして、こんなやりとりをうなずきながら静かに
聞いていた二年生のお父さんが、次のように話され
ました。「皆さんのご心配はもつともでしょう。私
も四年生の長女の入学の時には心配しました。で
も、いくら心配したところで、一生親が付いていて
やれるわけではないのです。わが子の力を信じて後
押ししてやりましょう」。

この発言の後、皆の表情が明るくなり、場が和や

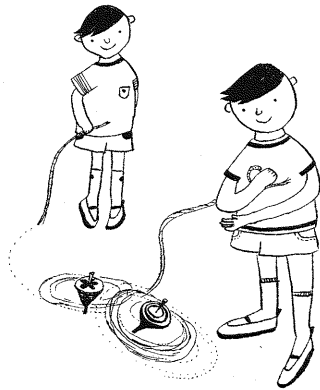
かな雰囲気になりました。指導員の私ではなく、子育てをする仲間のお父さんから出た言葉だったことがとても意義のあるものだったのです。「わが子の力を信じましょう」。これほど勇気づけられた言葉はなかったと思います。親も一緒に悩んだり、楽しいことを共有し合ったりできる仲間が欲しいのです。

保護者に伝えたいこと

毎年感じるのは保護者の思いも家庭環境も実にさまざまで、家庭によって何と違うことかということですね。そういう中に身を置く子どもたちが学童クラブで一緒に過ごすのですから、トラブル（けんか、学童クラブの行きしぶり、下校中の寄り道、持ち物のやりとりや破損など）が起きないはずはありません。起きて当たり前として、それを解決し、乗り越え、仲間として許し合い、再び楽しい時間を共有で

きるようになることが子どもの成長の機会となるのではないのでしょうか。

けんかの後、その日には謝れなくても、次の日に「一緒に遊ぼう」と誘いかけて関係を修復することもできます。子どもたちには、自分の気持ちを言葉で表現させて話し合われます。また、時には学童クラブ全体の問題として皆で考える場面をつくって解決の方法を一緒に探ります。そして保護者にはトラブルをていねいに伝えつつ、援助し、見守るようお



願っています。

個人面談では「お手伝いをしていますか」と必ずお聞きします。自分のことが自分でできるのはもちろん大切なことですが、何か一つ家族のために働くことがとても大事だと思います。「かわいくて手伝いなんてさせられない」「祖父母がいるので手伝うことなんて何もない」という家庭もあります。でも子どもは常にかわいがられ、保護されるだけの存在でよいのでしょうか。

子どもたちは、好奇心の塊で新しいことを覚えたがっていますし、自分も人の役に立ちたいと思っています。学童クラブでは面倒をかけることがあってもいいけれど、自分も人の面倒を引き受けてあげるよ、そんな気持ちでいてほしいと思います。年の違う子どもたちが生活する場だからこそ、年長者の力量が発揮される場面が多くあります。私も、その力を引き出せる学童クラブの運営を心がけています。

今後の子どもたちの居場所は・・・

昨年、厚生労働省と文部科学省から出された「放課後子どもプラン」は、すべての小学校区で放課後の健やかな活動場所を確保する目的で、地域の方やボランティアの大学生と過ごす地域子ども教室と学童クラブを実施するものです。

二つの事業を連携して行うか、一体化して行うかは自治体に任されています。どちらにしても、子どもの居場所となる新たな制度が始まるにあたり、「時間」「空間」「仲間」と、「お帰り」と言って迎え入れてくれる大人がいることを保障し、地域の人たちと保護者がつながって子どもたちの成長に立ち合える場となることを願ってやみません。

A君らが仲間たちと一緒に夢中になって遊び、そこで子どもたちの笑顔が輝いてこそ、子どもの居場所の証なのですから。
(学童クラブ指導員)

海外の窓から見えた日本の幼児教育

松本信吾

海外の幼稚園を視察すること

昨年の秋に、スペインとフランスの幼稚園や学校を視察する機会を得ました。海外旅行をして初めて自分の国のことが見えてくるとよく言われるように、海外の幼稚園を視察することで日本の幼児教育について初めて気づく部分も多いと感じています。私は幸いにも、何度か海外の幼稚園を視察しましたので、その経験を通して気づいたことや感じたことを、書かせていただこうと思います。はじめにお断りしなければなりません、ここで記す内容は、あくまでも私個人が経験し感じたことなのです。

で、客観性に欠ける面があると思いますし、その国の教育事情全体を表すものとはなっていない面も多々あると思います。その点を了承していただきながら、一保育者の感想として、お読みください。

衝撃的だったスウェーデン

初めて海外の幼稚園を視察したのは、スウェーデンでした。六年前のことです。海外の幼稚園についての知識をもっていないなかった私にとって、それは衝撃的でした。一番驚いたのは、一クラスの人数が少ないこと、そして、保育室などの環境が充実していることでした。一ク

ラスの人数は二十人程度で、幼稚園には、メインの保育室のほかに、アトリエ部屋、絵本部屋、ままごと部屋、工作部屋などが用意されていました。その中で行われる保育は「遊びが中心」「幼児の興味や関心を大事にする」という日本と共通するものでした。自然を大切にしているのも日本と同じで、いや日本以上に自然とのかわりを大切にしていることを感じました。

さらには、幼児の関心をもとにした少人数のプロジェクト活動が行われていたり、幼稚園児が小学校の授業に自由に行き来して授業に参加したりするなど、幼小連携も自然な形で進んでいました。

このような豊かな教育環境を支えている背景には、国民一人ひとりの幼児教育に対する意識の高さがあると思います。ホームステイ先のご主人に、三十五人のクラスを一人で担任している、と話したところ、*“terribly (恐ろしい)”*と言われました。そんな環境でよい保育ができるのか、と問われたわけです。彼は教育とは無関係の仕事をしてきた人ですが、幼児にはよい教育環境を与え



▲森の中での集いが毎日行われていました。

るべきで、そのための必要な税金は使うべきだと考えていました。彼に代表されるように、国民全体に教育に対する高い価値が形成されていることを感じました。

スペイン・フランスの印象

その後、オーストラリアやドイツの視察を通して、クラス規模に関しては、日本の三十五人学級のほうがむしろ異常だということが見えてきましたし、幼児の学びや評価に関しても、日本はすべきことがたくさんあることを感じていました。

そしてこのたび、スペインとフランスの幼稚園や学校を視察する機会を得ました。スペインは、大変景気のよい状態が長い間続いています。国力が上がっている中、以前の「ピレネー山脈を越えたらアフリカ」と言われていた時代を払拭しようと、教育費にかなり高い割合で予算を割り当てています。その象徴が英語教育と科学教育です。国際的な競争力を身につけようとしている姿勢が、国全体から感じられました。



▲コンクリートの上で遊ぶ子どもたち。
遊びの時間も空間も保障されていませんでした。



▲文字の勉強をする4歳児。
遊びは、やはり「休み時間」に行われていました。

そのような背景もあるのでしょう、案内された一つは、バイリンガルの幼稚園で、半分の授業（活動）は、先生が英語のみで行っていました。ここに「授業」と書いたように、幼児期から、かなり組織的に時間割が組まれ、その合間が「休み時間」としての遊びの時間でした。しかもその場所は、コンクリートの上でした。

驚くべきことに、この学校は公立です。このようなバイリンガルの幼稚園や学校は大変人気があるので、訪問した州では今後も増やしていく方向なのだそうです。

また、幼稚園に入る前の一歳から三歳までの子どもたちを対象にした保育所を訪問したのですが、そこでは、しつけと学習を重んじた活動を行っており、先生がとても厳しく、子どもたちは黙って先生の言うことを聞かされてきました。その先生方は、自分たちの実践は、保護者からも進学する幼稚園からも高く評価されていると自負していました。この二つの施設がスペインの代表だとは思いませんが、国としての教育の方向性を指し示していると感じました。

一方フランスでは、一般的な幼稚園を訪問しましたが、ここでも幼児期からの組織的な勉強が行われていました。特に読み書きを中心にしたカリキュラムが組まれ、一人ひとりの到達度を考慮しながら勉強するスタイルができていました。通知票のような到達度表もあり、規準に達しないと、留年してもう一年その学年をすることもあるそうです。

フランスのこのような背景には、移民の問題や失業者の問題で、家庭での教育が崩壊しているという危機感があるようです。親の養育が機能せず母語も話せない子どもが多いという現状、またそのような子どもたちが将来犯罪に手を染める危険が高いという認識から、幼児期に基礎的な学力を身につけさせることに重点を置いた教育が行われていました。

制度としての日本の遅れ

スペイン、フランスの状況に比べると、遊びに価値を置くことのできる日本の状況は恵まれていると言えるで

しょう。しかし一方で、制度の面に目を向けると、スペイン、フランスともに三歳児以降の公教育は、私立幼稚園も含めて無償ですし、一クラス二十人程度のクラス運営がなされています。また、幼稚園教師の資格も、大学卒業以上で、小学校教師と同じ資格になっているために、教師の質の面でも日本より優れているかもしれません。

また、日本の幼児教育は、幼稚園教育要領に示されている理念としては世界に誇れるものであり、他国の先生方も「すばらしい・うらやましい」と認めてくださるものでしたが、現実にはそれぞれの幼児教育機関によってあまりにバラバラの教育内容が営まれているのが現状なのは、周知のとおりです。

海外視察を通して見えてきたこと

このように見えてくると、教育は国の事情によってずいぶん形が変わることが見えてきました。特に幼児教育はその傾向が強いように思えます。海外の幼稚園視察を通

して、大切にしたいと感じたことを最後に記したいと思っています。

① 幼児の主體的な活動を大事にした保育を

現在日本で行われている遊びを中心とした保育は、即物的な学習効果に目を向ける必要がない恵まれた状況だからこそ可能だとも言えます。読み書きや計算などの目に見える能力の伸長を求める声が大きくなっている中、私たちは、遊びの意味を見つめ直し、その豊かな価値を再認識する必要があると感じています。

② 教育制度に対する多面的な視点を

海外に目を向けると、教育を取り巻く制度は実にさまざまです。日本のほうが非常識だと思えることもたくさんあります。制度そのものを個人で変えることは難しいでしょうが、日本でのやり方を当たり前としないで、ほかのやり方や考え方もあるという視点の広がりをもつことは必要だと考えます。

③ 幼児教育に対する価値形成を

幼児教育は、それぞれの国の教育観、幼児観がよく現れています。スウェーデンの幼児教育を支えているのは、高い税金でもありますが、“terribly”に象徴されるように、幼児教育に対する価値観だと思います。価値観が、幼児教育の質を向上させているのです。一方、日本はどうでしょうか。幼児期の教育は、非合理的であり、目に見えにくい面が大きいので、近年小学校に合わせたような合理性や評価を取り入れようとする動きが大きくなってきているのではないのでしょうか。また、幼児より保護者ニーズばかりをめざしている幼児教育施設も増えているように思います。幼児教育に対する価値観は決して高いものとは言えないのが現状でしょう。

幼児教育に対する価値を形成し、質を高めていくためには、私たち幼児教育関係者が、幼児教育の価値を実践を通して発信していくことが必要でしょう。海外の窓から日本の幼児教育を見て、その使命を強く感じています。

(広島大学附属幼稚園)

保育者になったころ(3)

熱い想い

大多和 檀

昭和四十二年四月、東京都港区立N幼稚園で、私は幼稚園の先生のスタートを切りました。「いま、ここで、新しく」「保育は、先生と子どもの信頼関係」「先生と子どもが見えない糸でしっかりとつながれば子どもは何でもできる」「心がつながることが一番大事。それには、子どもたちと遊び、かかわりながら互いに知っていく」「遊びこそが大切」とい

う想いを胸に、朝から帰りまで、子どもたちとひたすら遊ぶ日々でした。

「幼稚園の先生になろう！」まで

①周郷博先生との出会い

私は、高校を卒業後、ある大学に併設された二年制の幼稚園教員養成課程（幼教）に入学しました。

私にとっては、女子だけの学校生活は初めてで、雰
囲気になじめませんでした。でも、周郷博先生との
出会いは、そんな私を大きく変えました。

周郷先生は最初の授業で、シモーヌ・ベージュ（若
くして亡くなった、ユダヤ人。哲学者）の話をして
くださいました。「この人はまだまだ硬いつぼみの
ままで死んでいる。だからとつてもいい顔をしてる
んだよ」の言葉に、その場で周りを見渡しました。
この時、「確かに女もいい顔をしている」「女もいい
かもしれない」という思いが浮かび、女子ばかりの
学校もいいと思えるようになったのです。

また、私は小さいころから、「人が死ぬというこ
とがどういうことか」「何のために勉強するのか」
と、ずっと不思議に思っていました。周郷先生は体
調が悪かったのか、いつも倒れそうになりながら遅
れて講義室に入つてこられました。講義室に入る
なり、黒板に「人が生きるってどういうことだろ

う」と書いたのです。「やっとうこういうことが話せ
る人がここにいらした」と、心の底から思いまし
た。そして、ここから私の学びを始めることができ
ました。

② 附属幼稚園での子どもたちとの出会い

このころの私は、「女の人ってどうしてこんなに
話を通じないのか」「どう人とかかわれるか」と
迷っていた時期でもありました。

幼教では、週に一日、大学の附属幼稚園に配属さ
れました。そこで、心が揺さぶられた出来事が二つ
ありました。

一つ目の出来事です。三歳児のY子ちゃんは本当
にいい子だけれど、顔の造作としてはあまりめだた
ない女の子。Tくんはとてもハンサムで石坂浩二
（そのころの美男子の代表的な俳優）似の五歳児。
この二人はとても仲良しでした。ある日、「僕たち

大きくなったらお船に乗って、アメリカに行くんだよね」と言っているのを聞きました。

「えーっ、すごいな。外見でなく、子どものほうが、本当のところを見るんだ」と感動しました。単なる子どもの言葉、というのではなく、青春時代を過ごしている私の心にも、とても響いたのでした。

もう一つは、三歳児のAくんBくんの間に起こったことです。Aくんは一人で汽車をつなげていました。それはそれは、とても楽しそうでした。その様子をジーンと見ているBくんがいました。「入れて」と言いませんが、「ほくもやりたいな」という顔をしていました。Bくんに気がついたのです。う。AくんはBくんに、汽車を一つ渡して、「つなげていいよ」とひとこと言ったのです。Bくんの顔はにこにこ輝いていました。

「(一緒に)やろう」ではないのです。「何てすごいんだ。人とかかわっていく基(もと)が三歳児にあ

るんだ」。人とかかわりを学べるのが幼稚園。私も子どもとかかわりながら学ぼう、幼稚園の先生になろうと思ったのです。

熱い想いをもつて

N幼稚園は、四歳児クラスと五歳児クラスがそれぞれ二クラスずつの幼稚園でした。三十代の先生が二人、四十代の先生が一人、そして新卒の私の四人がクラス担任です。主任は四十代で私の赴任と同時にN幼稚園に異動してきた方でした。

三人は、決まった時間になると全員保育室に入っていきます。私は、一人ひとりが違うのだから」と、一斉に保育室に入って何かをすることはありませんでした。

母親にとっては、新卒というだけでも不安なのに、周りの先生たちとは全く違う保育をしていたのですから、なおさら不安です。母親たちから「幼稚

園では先生と子どもが集まって、歌を教わったり、折紙を教わったり……。もっとそういうことをやらな
いんですか。こんなにずっと遊んでいて、小学校に
行って大丈夫ですか」という話が出てきました。

私は「大丈夫です」と言い切りました。そして、

「子どもは、『これが大好き』と言って目を輝かせて
遊んでほしいし、その遊びの中で、その子が今、絵
を描きたいんだな、というなら絵の用意をするし、
その子が歌が歌いたいんだな、と思えば一緒に歌も
歌う。一日にいつべんも集まらないわけではなく、
お弁当の時は、『お弁当だから片づけしようね』と
言っています。お帰り前には、『もうお帰りの時間
だから片づけて集まろうね』と言って、その時には
話もしている。一対四十人で、ということもやって
います。私は二年間かけてやりますから、もう少し
見ててください」と話しました。

当時の親御さんは今の親御さんとは違っていたよ

うに思います。「幼稚園のことは幼稚園にお任せし
ましよう」と言ってくれたのです。よくこんな二十
歳そこそこの小娘に、自分の大事な子どもを委ねて
くれたものだと、今振り返っても、ごめんなさい、
ありがとうの思いでいっぱいになります。

後日談ですが、卒園を前にして、ある母親が、
「あんなにゴチャゴチャしているように見えても、
子どもは幼稚園が大好きでした。何か魅力があった
んでしょう。親にとっては我が子が幼稚園へ行きたく
いって楽しく行ってくれるのが一番の幸せで
す」と話してくださいました。この時は本当にうれ
しかったです。

また、「私たち、先生のやり方は大丈夫かと思っ
ていた。でも小学校へ行ったら、ちゃんと座ってお
話を聞いていました」と報告してくれる母親もいま
ました。あの時の母親たちには、本当に感謝していま
す。

主任の先生に支えられて

母親たちは、私の迫方に圧倒されたのかもしれないですし、ああいうふうに言っているからしようがないかなと思つたのかもしれない。学級懇談会で初めに聞かれた後は、母親からの不満が、私の耳に直接入ってきた記憶はありません。主任がすべて受け止めてくれていたのです。『お話を聞く態度をどういうふうに養つていくのか』『絵をどんなふうに教えているのか』は私から聞いておきましょう」と、いう具合です。

主任は、常に私に「あなたは どうして そういうことをしているの?」「どうして?」「どうして?」と聞いてくれました。そのたびに、私は「幼稚園教育は、何かを教えるところではない。子どもたちが、自分以外の他人がいるということをやつて受け入れて、しかも全くの他人と一緒にいて楽しいね、

自分と違うけれどお友達といると楽しい、ひとりでも楽しいこともある、明日も幼稚園へ行きたいな、と子どもが思うことが幼児教育と思つています」と言っていました。

主任は、ほかの先生からの忠告にも「大多和さんはすごく想いがあるみたいだから、もう少し見てあげましょう」と言ってくれていたと、後になって知りました。

私のクラスの子どもたちは、遊戯室、保育室、庭と自由に遊び回っていましたから、「あちらこちらにいる子どもをどうやってみるの」と聞かれたこともありました。この時は、「大丈夫です。あの子と私はちゃんと結ばれているから、何かがあつたって行つたらすぐに言いに来てくれる、信頼関係で結ばれているから大丈夫なんです」と、ここでも迷いもなく言い切っていました。「若さ」ですね。

話し合える仲間を得て

二年目の四月。私以外の三人の担任がそろって異動していきました。担任は若い保育者ばかりになりました。この後、数年間は、この四人のメンバーで「保育者は、子どもに何ができて何をしてあげられるのか」を常に話し、それぞれの意見も言い合い、熱い日々でした。



主任は、自由にやらせてくれたというわけではありませぬ。ことあるごとに、「私のような教育を受けたものに、あなたたちの考えは理解できないから、私にわかるように話してください」と言っていました。それが良かった

のです。自分の思いを伝えるために必死になりました。とても勉強になったと思います。自分を振り返らなければならなかったからです。この主任は、「自分の考えとは違い過ぎてびっくりすることが多かった。しかも、何の迷いもなく信念をもっている。『どうして?』と、そのたびに聞いていたが、説明されて、そういう保育もあるんだ、と思った」と、後になって話してくれました。

最もびっくりさせたのは、ある年の誕生会に、「幼稚園の屋根の上におにぎりを食べたい」ということだったかもしれませぬ。誕生会のおやつは、子どもたちと一緒にいろいろ作っていましたが、卒園間近のころ、子どもたちは、小学校入学を楽しみにして歌う童謡から思いついたのです。私も、小さいころ、屋根の上のつた時、空が広く広く見え、その気持ちをおこの時も覚えていたので、主任に話しました。

主任には、「幼稚園教育課程の中で、屋根の上に乗っておにぎりを食べるなんて入っていない。それをやるっていうのはどういうこと」と厳しく言われました。それに対して、その時の子どもたちの生活の流れや、どういうところでこの希望が出てきたのかについてや、どうして「おにぎり」なのかなどを話しました。そして、「それは子どもたちの夢で、私たち大人は子どもの夢をかなえてあげたい。それが実現したら子どもたちはどんなにうれしく思うか」と。

ついに、主任から「けが人を出したら私たちはクビよ」と言われながらも、計画を進めることができました。子どもたちとは、おにぎりが転がっても絶対に立ち上がらないことを約束し、どうやって屋根に上るか、降りるかも何度も練習して…。当日は、皆、慎重に、慎重に上りました。子どもたちにも、とても楽しい思い出になり、高校生になった時、

「楽しかったよね、屋根の上でおにぎり食べて」「弟の時はどうしてなかったの?」「先生、気持ちよかったね。でも『いいですよ』といってもらうためには大変だったな」と話していました。

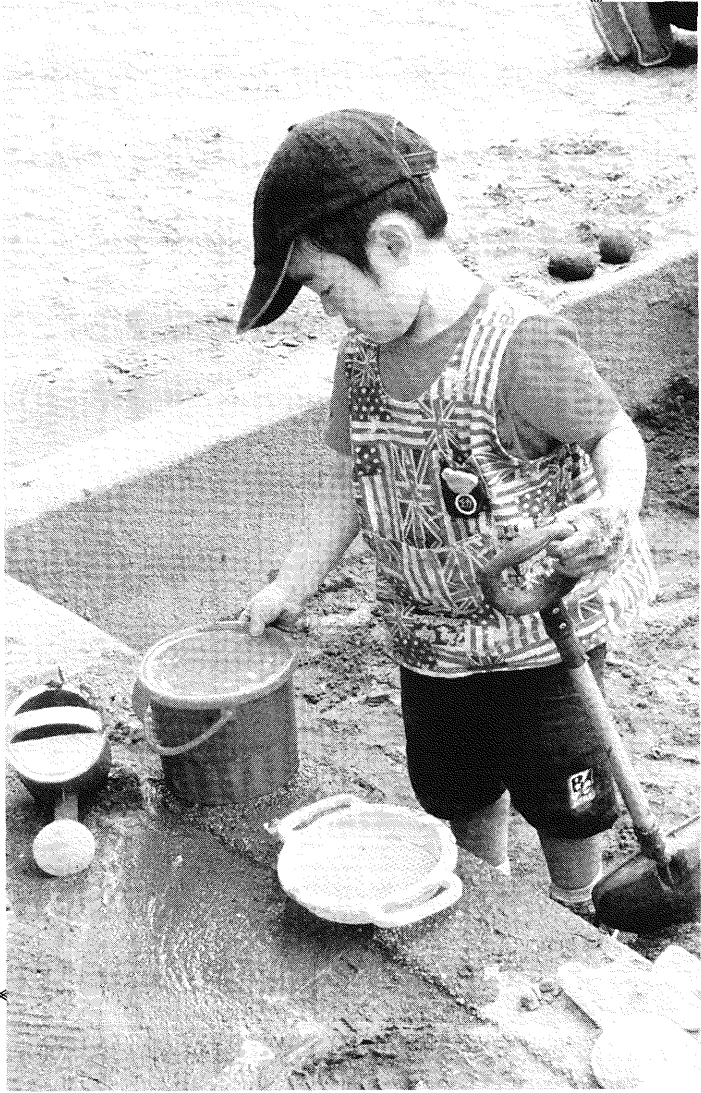
最近保育者になった方へ

「失敗なんてしてもいい。最後の責任は私が取ります。それが園長なんだから。それよりも、もっと『私こういう保育がやりたい』というのをやるんだよ。失敗は当たり前。最初からうまくなんていかない。でも、自分はこういう思いがあるんです、と言えることが大事」と、いつもみんなに言っています。

子どもたちはとても健気です。「この人があなたの先生よ」と言われれば、無条件で受け入れてくれます。だからこそ、その思いに、どんなことがあっても応えてあげたいと思いませんか、心を込めて。

(横浜市 まこと幼稚園)

ある日



撮影・平野 清

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(8)〉

観察するイメージするイメージ

植村朋弘

幼稚園での観察

デザインを専門分野とする者にとって、幼児を観察する体験は、「イメージするということ」への新しい気づきを与えてくれた。そのことについて述べようと思う。

お茶の水女子大学生活科学部で開講されている「保育臨床実習」という授業において非常勤講師としてかかわることになった。期間は半期週一日二コマの授業であっ

た。一時限目に幼児の活動の様子を観察し、二時限目にはその内容について発表しディスカッションするという形式で行われた。幼児を観察することは、初めての体験であり、当初から若干の戸惑いを感じていた。また幼児を観察する目標も、自分の中では決して明確だったわけではなく、興味としては、幼児が遊びの中でどのように他者と道具とかかわり展開していくのか、ということだった。これを前提に、幼児の観察について、デザイン行為

としての観察との違いを踏まえながら、イメージという共通のはたらきについて述べる。

観察の方法

観察の目的は、幼稚園もしくは保育園に赴き、その中で幼児達の活動を観ること、保育者の幼児へのかかわりを観ることを通して保育について考えていくことである。観察の方法は、幼児や保育者とは直接かかわらないよう、話しかけることなく、ただ起こっている現象そのものを精査することだった。そして、そこで感じ取ったこと考えたことを小さなメモ用紙にテキストや簡単な絵にして書き留めることだった。それは可能な限り幼児たちにとって自然な活動ができるよう注意を払うこと、保育の邪魔にならないことを極力重視したからである。よって写真撮影や録音・録画も行わなかった。それは幼児たち・保育者への当然の配慮だった。

とはいえ、幼児の観察を始めた時、戸惑いを感じたのは、「観察者自身が幼児や保育者と会話することができ

ない」ということだった。観察者は観察している状況において、自ら発する問いかけと、それに対する答えを手がかりに、その行為や発話についての意図や意味を見いだすことができなかったのである。そこで何が観察できるのか、まさに雲をつかむように漠然と感じていたのである。幼児たちがどのように他者とかかわりながら活動しているのか、何を考えているのか、それに対して保育としてどうかかわるべきなのか、観察したこと、目の前で起こっていることの意図や意味について確信をもったとらえ方ができないように感じていたのである。

デザインとしての観察について

それは、デザイン開発での観察と一見違っているように思われたからである。デザインとは、生活の中で人々が見たり、使ったり、考えたりなどさまざまな活動を支えるために、機能的でわかりやすく美しい形や色を与える秩序づけていく行為である。それとかがわる人々にとって、より豊かに心地よい環境と活動をもたらししていく。

デザインにとつての観察は、基本的には次のようなかたちで行われる。たとえばデザイナーがある道具をデザインする場合、使い手「ユーザー」と道具や環境との関係をとらえながら、活動の過程を観察していく。その時デザイナーは、ユーザー自身が遂行している思考や行為について、何を意図しているのか、どのような問題が起きているのか、どのような手段や方略を使おうとしたのかなど、できるだけ具体的に包括的に状況を把握していく。そのために観察者である「デザイナー」は、ユーザーに対してその状況を踏まえながら、聴き取りを行い、問題を明らかにしていく。場合によってデザイナーは、ユーザーになりきって、ユーザーの立場から反芻し、問題をとらえ直していく。ユーザーになって自分の目やからだで確かめ感じていくのである。それを手がかりにどのような思考や行為を支援すればよいのか、現実はまだ存在していない適正な形やはたらきを「イメージ」しながら解決しようと、具体的な形を創り上げていく。デザイナーは、ユーザー自身がまだ気づいてい

ないことも含め、深い見識と洞察力をもって問題を発見していく。デザイナーとしての構想力(イメージ力)や創造力が要求される。

幼児の観察を通して

観察結果の発表は、次のような方法で行われた。発表者は、観察時に記録したメモをもとに発表していく。その場に居合わせていないほかの学生たちは、その話を手がかりに観察内容を理解していく。この理解していく手だてが、イメージすることなのだ。その発表者が話す状況や、幼児とその人数、そこに居合わせた保育者などの様子をもとにストーリーを構成していく。ちょうど、文学作品を読みながらイメージしているようにである。ストーリーを聴きながらイメージしているようにである。しかしイメージの内容は、発表者と発表を聴いている他者との間に必ず隔たりがある。その場で発表者と同じ状況を観察していない限り、決して同じ状況をイメージすることはあり得ない。他者である聴き手は、発表者の話

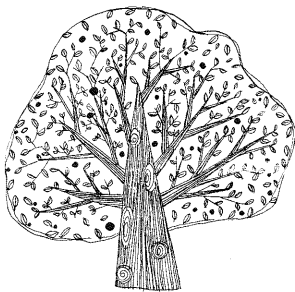
を手がかりに再構成していくしかないのである。

他者が観察した内容を聴くことは、実感をもちにくい話のように思われた。一見理解に満足感がもてないように感じられたのである。また話を聴くことによって、自分の観察したこととどのように関係しているのかについての確信も得られにくいように感じられた。ここから何を学べるのが、授業の中で自分自身への問いでもあった。とりあえず学生たちが話す内容を理解できるように、その様子を観察者に質問していくしかなかったのである。質問を投げかけると、発表者である観察者は、思い返しながら答えていく。その時の状況をもとに「そういうえげごだったと思う」という本人自身あまり気づいていなかった内容を、指摘されることで出来事を思い出していく。質問を投げかけられることは、観察者にとって大切なことで、観察した内容についての気づきを与えられていく。このように発表者と聴く側との間に、相互のコミュニケーションによって、共通イメージが生まれていくのである。つまり観察者も事実を踏まえなが

ら、コミュニケーションを通して改めてイメージを構成していく。

イメージすることと事実との違い

話を聴いている他者がイメージを構成していく特徴は、どこにあるのだろうか。そのイメージは、話を聞いている他者に委ねられ、自由に構成されていく。一方、状況事実を観ていた観察者は、その保育者、周りのしつらえや明るさ、道具をはじめ、その幼児の声や表情、態度や動き、話の内容や話し方などその状況を構成する具体的な情報をもとにイメージしていく。しかし、話を聴いている者にとってのイメージは、これらの具体的な情報のほとんどが「想定」したものである。実はそれらを想定できるからこそ、自由に構成し何度も頭の中でつく



り変え、繰り返し再生できるという効力があることがわかったのである。

ひとつに「見えの設定」を自由にすることが挙げられる。たとえば、幼児の視点になったり、他の幼児の視点になったり、保育者の視点になったり、客観的な神様視点に立ったりしながら、それぞれの「見え」や立場からのイメージを展開することができる。また、その視点を自由に移動しながらとらえることができる。さらに視点だけでなく、それぞれ登場する人物の性格や表情、声色なども想定していくことができるのだ。ちょうど映画のシーンを観るように、映画監督やカメラマンのように構成していくことができる。さらに、他者とのデイスカッションを通して、これらをどんどん変えて構成していくことができる。それぞれイメージした状況をもとに、幼児や保育者の心情や考えを展開して行うことができるのである。そしてイメージの中で設定された中に登場している人物の視点を移動したり、自分でなってみたり離れたりしながらとらえていくことができる。一つのシーン

を多面的にとらえながら、そこでの事実と意味を何度もとらえ直していくことができる。

これらを繰り返し返すことを通して観察者は、幼児や保育者に対する見識を深めていくのである。ここでの再構成は、結果的に実際に起こった現象とは違った要素が含まれてしまうのかもしれない。しかしそこにはフィクションではない事実に基づいた現実性と解釈が存在している。

幼児を理解することのおもしろさ

さらに興味深いのは、幼児そのものの理解についてである。幼児がどんなことを考えているのか、観察していると不思議な感覚になる。つまり同じ人間であるにもかかわらず、はつきりした理解ができない場合がある。しかし全くできないというのではなく、できそうできないのである。わかったかに思えるが、そうかと思うと手元からすり抜けていくような感じになる。観察している時、たとえ幼児にその行為の意図を尋ねたとしても、満足な答えが得られないと思われる。理解できないという

不満よりも、実はそこが何とも言えない魅力となり、観察者としてわかりたいという意識が生まれ、幼児への好奇心と探究心が変わっていくのである。

幼児は同じ人間であるのに、大人とは違った生き物なのだ。自分自身が幼児のころ何を考えていたのか、ほとんど覚えていない。しかし、観察者がおそらく、そのわかりそうでわからない対象とかかわり、そこからお互いが会える時、つまり幼児を理解できたり思いが伝わったりするように思えた時、ある種の充実感と満足感を与えられるのではないだろうか。その出会いは、日々その幼児とのかかわりの中から、得られていくものと思われる。

イメージに基づいた洞察力と保育のデザイン

つかみにくくわかりにくい幼児だからこそ、自由度のあるイメージの力で構成していくことが適しており、効果的と言えるのかもしれない。そこにそれぞれ個人的な解釈を創り出し、それをもとに幼児にかかわっていくと

いう、教育の多様性と創造性が生まれると言える。

一方、わからないからこそ、思い込みに陥らないよう、観察者同士もしくは保育の場では保育者同士のかかわりとコミュニケーションが不可欠である。そのコミュニケーションによって、保育者たちの間で幼児の行動や状態に関する情報を共有しつつ多面的で多様なかかわりをもった保育が可能になる。つまり保育者全員で幼児一人ひとりを愛でることが大切なのである。さらに保育者は、実践の中で観察者であり、それぞれがイメージする力をもって幼児や保育者自身が気づいてないことを含めて創造的に保育していくこと、つまり「保育をデザインしている」と言えるのだ。

観察に大切なことは、イメージしたことが事実には忠実であるかはもとより、ある事実を前にした時、イメージで再構成し、それを手がかりに現象をきめ細かく洞察力をもつてとらえ、解釈できるような力を養うこと、それらを保育につなげていく発想をもつことなのだ。それを支えるのがイメージ力なのである。

(多摩美術大学)

子どもと保育の情景 (8)

遊びは不思議

戸田雅美

幼稚園の秋の一日、私は三歳児の保育室にいた。その日は、次々とトラブルが起こって、子どもが泣いていた。見ると、どのトラブルにもたつきが関係しているらしい。保育者が、子どもの訴えを聞いて、たつきを呼んできて話を聞いている場面が多かった。たつきは、保育者の話を聞きながら、「わかった」というようにうなずくこともあるのだが、興味を引くものがあると、そちらに気を取られて、話も耳に入らないように見える時もある。

たつきは、入園当初から、三歳児の中でも目立つ存在で、保育室に子どもたちが集まってきた時に一緒にいることはほとんどなかった。そのような時には、担任は、四歳児や五歳児のクラスにたつきを探しに行くことになる。たつきは、おもしろいことが目に入ると、四歳児や

五歳児のクラスでも入って行き、自分より年長の子どもたちに、何となく受け入れられて過ごすことが多かったからである。

この日は、たまたま四、五歳児のクラスの遊びが、たつきにとっては、あまりおもしろいとは思えなかったのか、自分のクラスの子どもたちに興味が出てきたのか、朝からずっと、同じクラスの子どもたちの周りをうろろしていた。おもしろそうだと思うと、いきなりまごとの場に入り込んで鍋で料理を始める。すると、「その鍋は私が使っていたのに……」となつみが泣きだし、一緒に遊んでいたあやが、担任に「たつき君が鍋を取った」と訴えるという具合だった。その後も、はるきとゆうだいの戦いごっこがおもしろいと思っただらしく、戦い

のふりをして二人にとびかかってしまい、ゆうだいが転んで泣きだすというトラブルもあった。

朝からこんな状態だったためか、たつきは、おもしろいと思ったからかかわっていくというよりは、明らかに相手が嫌がると思われる様子で、材料を散らかしてみたり、使っているおもちゃを取ろうとしたりするようになってきてしまった。私は、朝から楽しそうにやってみては、結局トラブルになってしまったつきが気になっていたので、次第に、悪いとわかっているながら人の嫌がることを始めてしまっているたつきの気持ちがかわるきつかけはないかと思っ見ていた。

たまたま、たつきは、通りがかりにウレタン積み木が遊びかけのまま二、三個出ているのに気がついた。ふと、積み木を持ち上げるとひよいひよいと積み上げた。どうやらその積み木は誰にも使われていなかったらしく、そんなたつきの行動からトラブルになることはなかった。最初は、ほんの偶然に、遊びかけの雰囲気惹かれて積み木を積んだようだったが、積んでみる

と、何か感じるところがあったのか、周りを見回すと、私と目が合う。トラブル続きで硬い感じだった表情が和らいでいる。私が「高くなってきたね」と言うのと、にこっと笑って、さっと積み木を取りに行く。さらに三個積むと、積み木はたつきの背丈よりも高くなった。

再び私を振り返ったたつきの顔は「高くなってきたよ」と言っているように見えたので、「わあ、高くなつたね」とその表情に応えると、さらに笑顔になって、積み木を取りに行き、また積む。こんなふうには積んでいる



と、かなり高くなってくる。すると、ついさつき、たつきが鍋を取ったと言って怒っていたなつみとあやが、ちようどままごとが、一段落したところだったらしく、たつきの積み木の塔が「おもしろそうだ」という様子でやって来て、「たつき君入れて」と礼儀正しい雰囲気と言う。たつきも「いいよ」と答え、二人に「積み木取ってきて」と言うと、なつみもあやもにこにこしながら、積み木を取ってきては、たつきに渡す。渡し終わると、たつきが積み上げるのを見守って、二人の積み木が両方ともうまく積めたのを確認すると、二人そろってまた積み木を取りに行く。たつきは、積める所まで高く積みたという目標を持ったらしく、表情も真剣そのものになってきていた。

私は、この二人が、たつきの言うままに積み木を運んでいても楽しそうだったので、ほっとする思いで見ている。自分たちも積み木を積みたいと言い出したら、きつとたつきは拒否するに違いないので、またトラブルになる可能性が高かったからである。子ども同士のトラブル

はある意味あることが当たり前で、避けるべきこととは限らないわけだが、この日は、朝からトラブル続きで、ぎくしゃくしていたたつきがやつと見つけた遊びが満足できずに、またトラブルになることは避けたかった。さらに、いつもはその時々「おもしろい」と感じたものにすぐに気持ちが移ってしまいがちなたつきが、珍しくじつくりと真剣に取り組んでいることを大事にしたいとも願っていた。もし、この二人が、「積みたい」「たつき君だけずるい」と言い出したならば、たつきが自分で納得するところまで積むことができるように、また、二人の気持ちも尊重できるようにと、私はあれこれ考えていた。さらに、できれば三人が一緒に遊んでいるというこの雰囲気も壊れないように、何かできることはないかと思いつながら、でも、どのようにしたらよいのか工夫が思い浮かばないまま身構えていたからである。

結局、三人はうまい具合に、手分けをしながら、どこかで「積み木を高く積む」という思いはゆるやかに共有しながら、積み続け、とうとうたつきが台に乗って積み

る最高の高さまで積み上がった。もう一つ乗せようとして頑張ったのだがどうしても乗らず、かえってぐらつきそうになることに気づくと、自分でここまでと納得できようだった。台から降りると、よりいっそうの高さに満足したのか、私を見てふっと表情を緩めた。私は、たつきたちと同じ視点から見たくて、たつきのそばでしゃがんでみた。「高いねえ」と言うと、たつきも「高いねえ」と答えた。なつみとあやも驚いたように見上げていた。

しばらくすると、たつきは担任を呼んできて見せ、主任の先生を引っ張ってきて見せ、とうとう幼稚園中の保育者の手を引いてきては「高いね、たつちゃんがやったの？ なつちゃんとあやちゃんも運んだんだ」などと言われて満足そうだった。その後片づけの時には、はじめは「壊したくない」と言っていたのだが、担任の言葉を受け入れ、自分から、一つひとつ丁寧に下ろしていきながら、片づけていった。なつみとあやも、たつきの下ろしていく積み木を、楽しそうに運んで行っては、きれい

にしまっていた。

幼児期には遊びが大切と言われる。一般的には、このことは、「のびのび」「元氣」という程度の意味で受け止められることが多い。しかし、ほんの偶然から始めた遊びが、遊んでいくうちに楽しくなり、自分なりに目的といえるものができ、それが「ここで限界、やれるところまでできた」というような「納得」を自分ですることができる。そのプロセスを誰かに共感してもらいたいと人に心が向き、その人たちの言葉に心を傾けて、それを自分なりに受け止めて動くことを始める。

たつきのような子どもたちの姿を見ることは、決して珍しいことではなく、遊ぶことができる場でありさえすれば、いつでも見ることができると、ごく当たり前のことである。「遊びは不思議」と思わざるを得ない。

そしてまた、遊びと子どものこのような関係を、子どももすぐそばにありながらも、大人たちがなかなか気づくことができないことにも「遊びは不思議」と思わずにはいられない。

(東京家政大学)

●● 観察者と保育者の対話 (5)

……
観察者から保育者へ

観察者 M・S (保育史研究者)

〈二〇〇六年十月某日 都内〇幼稚園にて〉

その日は朝から雨だった。とめどなくあふれてくる、たくさんの人の流れが渦巻く中で、三歳児クラスの畳の空間はちよつと違って見えた。畳が一枚置かれている。そこを、三人の男の子が新聞紙とテープで囲い、嚴重なバリアを作り、プロックの武器を持って、何やら話し込んでいる。初めての場所に自分の居場所が見つからず、この幼稚園を初めて訪れて何となくふらふらしていた私は「ここにしよう」と畳のそばに座らせてもらうことにした。

人懐こい女の子が話しかけてきてくれる。「だ

あれ？」とMちゃん。「K先生のおともだちな」と私。「ふーん」と言つて、MちゃんとAちゃんは私の向かいのテーブルに座った。私はK先生の保育を遠巻きに眺め始めた。

K先生は同じ三歳児クラスの部屋の向こう側にいて、電車ごっこなのか、コンサートごっこなのか、一群の人たちといすを並べて何やら楽しそうに笑い声を上げていた。子どもたちは何か困ったことや報告するようなことがあると、K先生の背中にはびたつくついで、K先生の耳元に伝えてくる。その様子は、初訪問で多少なりとも緊張し

ていた私を、かなりほっとさせた。「いいよいよ、なんでもいいよ。大丈夫大丈夫、なんとかなるって」。そんなまなざしで、こうして日々受け止められていたら、柔らかな身体になっていくだろうと思つた。先生の背中にびたつくつについていく、子どもたちの身体。こんな身体を、今の時代に、どれだけの三歳の人たちがもつことを許されているだろう。畳バリアの方から見ても、K先生の背中はかなり近く見える。

居場所は、先生の身体という軸を中心にさまざまに構成されているようだった。では、子どもたちが先生から離れていくのはどんな時だろう。よく見ていると、それは、自分のロッカーに走っていった、小石やら紙くずやらの宝物を自分のかばんに詰めにいく時が多い。自分の家、お母さんや

お父さんと、そこでつながっているのかもしれない。それぞれの人が、それぞれの拠点をもつて、雨の日の保育室にすることが、だんだん見えてきた。

私がこんなことを考えながら、ぐるりと部屋を見回していると、「どうしておしゃべりしないの？」と向かいに座ったMちゃんに聞かれる。確かに。保育の観察とはいかにも難しい。関係ができ始めた大事な人を目の前に、「おしゃべりしないことになつてるの」と小さな声で伝えなくてはならない。いつもの彼女たちの場所に勝手に入ってきて、あたりをキョロキョロ見回して、しかも何のあいさつもなしである。怪しまれて当然。にもかかわらず、「おかしいよね」「そんなのおかしいよね」とMちゃんとAちゃんは、変な訪問者

どして過ごす時間が長かった。一方Tは、紙やブ
ロックで作った剣を振り回し、傍目にはいささか
粗暴な印象があった。登園時には泣き泣き保育室
に現れる日の続いたSであったが、いつのころか
らか、淡々と登園するようになる。朝、登園時間
が近づくと、「Sくん今日も、K先生の背中に行
くん。背中に行くと、気持ちの下に下りるん
だ」と言っかばんを自分から背負うのだと、S
の母親が教えてくれた。Tもまた、幼稚園での生
活の中で、抱かれたりもたれたりのかかわりを経
験していく。

二学期になると、背中にふーつと来る感じか
ら、Sかな、と思うとTだった、ということがと
みに多くなった。今やSとTは、似た雰囲気のか
らだの委ね方をする人たちになっている、という

のは、何とも不思議なことだと思う。

目でとらえやすい活動に対しては、言葉でも対
応しやすいが、子どもが動かずにいる／戸惑う／
迷うような時、それを受け止め、寄り添うには言
葉は説明的、選択的に過ぎる。物言わぬ背中
子どもと同じ向きに前方をとらえ、そのありよう
を拒むことなく、ただ受け止める。観察者の記録
を支えに感じて、背中に張りついてくる子どもの
心地よい重さを、私は今日もしみじみと味わって
いる。



編集後記

『幼児の教育』の編集委員たちは、メールするよりも会って話したほうが性分に合うというような者ばかりなせいか、今ごろ本誌のホームページを準備しております（今号が皆様のお手元に届くころには立ち上がっているといのですが）。遅ればせで恐縮ですが『復刻版・幼児の教育』（昭和28年まで）以降のバックナンバーを調べたいという方々のご要望に、ようやくお応えできるかと、こちらも楽しみにしています。

小さな子どもをいつくしみ育てることの意味を地道に追求してきたこの雑誌を、今後いっそうたくさんの方々が生活用し、ますます応援していただくきっかけになれば幸いです。また、本誌へのご感想・ご意見は右のメールアドレスまでお寄せくださいますようお願いいたします。 (H)

幼児の教育 第106巻 第8号

平成19年8月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集部 河合聡子
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社 フレーベル館
☎03-5395-6604（編集）
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円（本体524円）
©日本幼稚園協会 2007 Printed in Japan

表紙絵 林 健造
「子どもの楽園」
扉カット 林 健造
「ぼく ふをみて ひけるんだよ 5歳」
扉題字 津守 眞
カット 斎藤明子
編集委員 吉岡晶子・伊集院理子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613（営業）

次号予告

- ・波の音 遠藤めぐみ
- ・物語を生きる子どもたち 佐塚公代
- ・若手研究者からの報告（3） 市川良子

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



おたより大募集

ご意見ご感想をお寄せ下さい。今月号の中で、特によかったもの、取りあげてほしい内容などもお知らせください。本誌へのご投稿もお待ちしております。

はがき：〒113-8611 東京都文京区本駒込6-14-9（株）フレーベル館

「幼児の教育」編集部

Fax：03-5395-6622 E-mail：youjimap@yahoocoo.jp

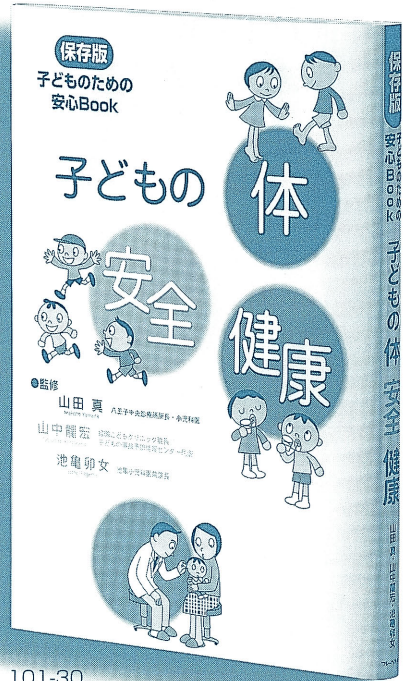
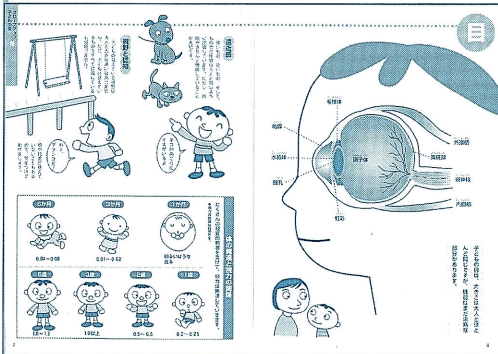
すぐわかる! 子どもの体のしくみ・
注意したい子どもの事故・子どもの病気と健康

保存版 子どものための安心Book

子どもの 体 安全 健康

山田 真・山中龍宏・池亀卯女 監修

子どもの体の不思議、
事故の予防、病気と健康のことなど、オール
図解でわかりやすく解説。保育現場や家庭で
役立つ、「安心子育て」のマニュアルです。



101-30

26×19cm 162頁
定価1,995円(税込)

- CONTENTS PART1 クローズアップ 子どもの体**
目／鼻／歯／耳／皮膚／爪・毛髪／手・足・筋肉／骨・関節／脳／おなか
アレルギー／心
- PART2 子どもの事故予防 安心ノート**
登園・園バスの事故／遊び・園庭・遊具／おでかけ・散歩での事故／熱中症・
落雷／日焼け・水の事故・虫刺され／誤飲／のど・耳・鼻・目に異物／動物
にかまれた・ひっかかれた・つかれた／やけど・感電／指をはさんだ・
打った／転倒・転落／切り傷・すり傷・刺し傷・脱臼・ねんざ
- PART3 子どもの病気 早わかりケアファイル**
花粉症／虫歯／食中毒／夏のうつる病気／皮膚のトラブル／くせと心の
トラブル／風邪／インフルエンザ／冬の事故・トラブル／耳・鼻のトラブル
ペットからうつる病気&寄生虫病

キダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

子どもと親を幸せにする保育者・支援者のための

保育カウンセリング講座

伊志嶺美津子 編著

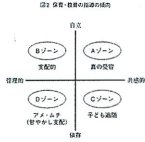
保育カウンセリングは、一人ひとりの子どもやその親の成長・発達をサポートし、望ましい援助的なかかわり方をするためにはなくてはならないものです。

いま、保育・幼児教育、子育て支援の現場で最も必要とされている保育カウンセリングの理論と技術を明らかにします。



101-40

図1 保育・幼児教育の領域



指導内容・方法	子ども像
集団的 自由・自律的発達支援	集団的発達支援
個別的 自由・自律的発達支援	個別的発達支援
集団的 自由・自律的発達支援	自由・自律的発達支援
個別的 自由・自律的発達支援	自由・自律的発達支援

図1 保育・幼児教育の領域

保育は、子どもが安全・安心な環境の中で、自己発達の力を伸ばすことを目指す。幼児教育は、子どもが自己発達の力を伸ばすことを目指す。保育と幼児教育は、子どもが自己発達の力を伸ばすことを目指す。

保育は、子どもが安全・安心な環境の中で、自己発達の力を伸ばすことを目指す。幼児教育は、子どもが自己発達の力を伸ばすことを目指す。保育と幼児教育は、子どもが自己発達の力を伸ばすことを目指す。

② 保育の現場とカウンセリング
保育の現場では、保育士が子どもと関わり、子どもの発達を支援するために、保育士自身がカウンセリングのスキルを身につける必要がある。

もくじ

- 第1章 保育カウンセリングとはなにか
- 第2章 子ども理解とカウンセリングマインド
- 第3章 カウンセリングマインドと保育実践
- 第4章 カウンセリングの基礎と親理解
- 第5章 保育者とカウンセラーの役割
- 第6章 カウンセラーとしての自己理解
- 第7章 子育て支援の現場とカウンセリング

21×15cm/232頁
定価1,680円(税込)

キダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円) ☆